

心理療法と幼児教育



松村康平

心理療法とは何か。

それは、療法をすすめる立場によって、いろいろに解釈される。

療法にもられる内容も、立場によって異なってくる。けれど、次のようにいえば、どの立場による心理療法にもあてはまるであろう。

心理療法とは、心理学の理論的・実践的・臨床的研究の成果を活用して、治療効果をあげることとする、治療法である。

心理療法はこれまで、その効果があがるのは、心因性の疾患であるとされて、そのみを対象とするものであるかのように理解される場合が多かった。だが、医学的治療も、患者との対人関係を基盤として行なわれるものであるから、心理学的治療（心理療法）は、どのような医学的治療においても、併用されなければならない。とくに、医学的治療をはじめの初期において、あるいはそれ以前に、

心理療法が行なわれていなければならぬ。医学的治療は、疾病のみを対象としてすすめらるべきではなく、疾病の状態にある人間（患者）に即してすすめらるべきものであることを、銘記していなければならぬ。心理療法は、患者が、いわゆる医学的治療を終えて日常生活をより健全に行なうことへの移行を、容易にするためにも、活用さるべき性質のものである。

心理療法は、どのような患者においても必ず成立し変化する心理的世界があるものとして治療をすすめる。その根底には、すべてを变化の可能性のあるものとして把握する立場がある。その立場が自覚されずに心理療法のすすめられている場合はあるが、この自覚がなければ、その発展をもたらすことはできない。

この立場から、心理療法における「診断」と「治療」について、

次に述べよう。

診断は、治療を行なうためのものであろうか。治療は、診断に続くものであろうか。このどちらも、正当とはいえない。一般には、診断と治療が、区別してとらえられている。しかし、患者の心理的世界においては、診断は、それにはたつきかけて変化をおこさせる。変化をおこさせずにはいないものであるから、その変化が治療的どのような効果をもたらすかをみきわめながら、診断がなされねばならない。つまり、診断は、治療的にすすめられなければならない。

診断が治療に先立つのではなく、むしろ、治療が診断に先立つのである。けれども、治療をすすめるのには、それを推進する手がかりが必要である。治療に即してその手がかりを得る診断の行なわれていく必要がある。治療は、診断的にすすめられなければならない。

このような、診断「即ち」治療は、どの心理療法においても行なわれていなければならないが、診断にも役立ち治療効果をももたらすことの実現されやすい療法の主なものとして、遊戯療法と心理劇とをあげることができる。

次に、心理療法の種類について述べよう。

心理療法は、治療者と患者との関係がどのようなものであるか、

その関係をどのように操作して治療効果をもたらそうとするものであるかなどの観点から、次のように大別することができる。

① 催眠療法 治療者が暗示を主な原理として治療をすすめる。
② 精神分析療法 患者における自由連想を活用して、分析治療をすすめる。

③ 面接療法 二者面談法(いわゆるカウンセリング)、三者面談法、多者面談法などがある。

④ 集団療法 集団理論(グループ・ダイナミックス、その他)を基礎として、集団効果を活用する。

なお、治療場面における活動の性質からみて、次のようにとらえることができる。

⑤ 遊戯療法 抑圧解放、過程性の原理を主として、遊戯活動を活用する

⑥ 心理劇 自発性・創造性の原理、役割の原理を主として、即興劇を活用する。

⑦ 作業療法 作業活動を活用する。森田療法にみられるこのほか、心理療法と併用されるべきものに、⑧ 転地療法、⑨ 理

化学的療法などがある。

心理療法は、患者の心理的世界が変化することによって治療効果をもたらせられるようにするものである。この効果をどのようにし

たaramたらすことができるか。そのための、適切な理論と技法が、求められる。また、なにを治療されたとするのであるか。立場の違いはあっても、治療の目的とするものについて明らかとなり、その治療効果をなによってとらえるのであるか。そのことも、明らかとなっていないなければならない。

治療の目的を、症状をなくすことにおくのではなく、生活のよりよい発展をもたらすことにおくならば、心理療法と教育とは、窮極において同じであることになるだろう。この立場からは、幼児にふさわしい教育の仕方があるのと同じような意味で、幼児にふさわしい治療の仕方があることになる。先に述べたいろいろな心理療法は、どれも幼児に活用し得るものではあるが、その中でも、幼児に活用して効果的なのは、遊戯療法と心理劇であるといえる。

症状によって療法の効用と限界がきまるとする立場からは、異論がとなえられるかもしれない。けれど、生活のよりよい発展をもたらすことに治療の目的をおくならば、療法を必要とする患者の生活を基準として、療法の選択をすることが可能である。

幼児の心理的世界の特性としては ①「極」不定性と ②過程性を、あげることができる。

私たちおとなの世界には、両極的な特性がある。この両極性は、子どもの世界に反映しているが、子どもの世界の特ちょうは、極の

さだまらない活動（発展的な円環運動）にみいだせる。子ども（幼児）の生活は、遊戯的であるといわれるが、これは、「極」不定性と過程性という概念で、説明することができる。

子どもたちは、目的をさだめ、それに向かってその目的のために何かをするといった両極的關係で遊ぶのではない。遊び自体に、過程性がある。この遊びが、子どもたちの具体的な生活であり、この生活を通して、「極」が明確化し、おとなの世界に近づくのである。

子どもたちの遊びには、つくるうちにつくるものがきまり、つくるものがきまってつくっていると、つくるもの（目的）がまた変わってくるといった経過をよみとれる。このような経過を、療法においても体験できるようにしなければならぬ。「遊戯療法」では、このことが満たされる。

立場による違いはあるが、遊戯療法は一般に、遊びにおいて「自分」を表現することが容易であるという前提にたっている。そのねらいは、遊びによって、抑圧を解放するだけでなく、自己表現のしかたや、より望ましい生活態度が身につくようにすることにある。

そうなるように、治療者が、指導的な立場をとるのではない。遊戯場面に参加しているもの自身が、自己を表現しながら、自己操縦のできていくようにする。つまり「自己指示的療法」となることが望ましい。治療者は、子どもを「信頼」し「容認」し「尊敬」する態

度をとる必要がある。子どもの感情を認めて受けいれるだけでなく、それを反映して、反映されたものを通して、子どもが自分で成長するのに役立つ「見通し」の得られるようにする必要がある。

(たとえば、ムスタカスの所説にみられる。)

遊戯療法と心理劇は、そのどちらも「自発性の原理」を重視する。両者の違いは、役割遊技と役割演技の違いにみいだせる。役割遊技とは、子どもたちが「なにか」に「なりたい」気持ちから、「なにか」の役割をとって演じることをさす。

心理劇の役割演技は、相互媒介的に行なわれる。「役割をとってふるまう」ことによって、「社会的なきまり」にふれ、それに方向づけられた心的傾向や行為のしかたが身についていくところに、役割演技の特色がある。

社会的に望ましいときされる「役割」が、しかし、外からおしつけられるわけではない。みずから選択して、ある「役割」を演じる。演技方は、各自にまかされている。それがただ「自己指示的」にのみ演じられるのではない。「役割をとる」ことが、すでに社会的な方向づけを意味しているだけでなく、その「役割」が、ほかの人たちとの交渉の中(行為場面)で、とられる。つまり、自分が行為する。それに対して、他の人の行為によるハネカエシの期待される場面、劇が演じられる。

遊戯療法では、遊戯そのもの、つまり「過程」が重視される。心理劇でも、これは重視されるが、劇的場面での「役割」のとり方と「洞察」が、それにもまして重要である。

遊戯療法も心理劇も、その理論と技法は、幼児教育の中でじゅうぶんに活用できるものである。治療を必要とする子どもが、幼児教育者たちの、心理療法に関する理論と技法の無理解によって、そうなってしまうこともある。

心理療法を必要としない子どもたちの教師であろうと、熱心な教育者たちは意図するであろう。けれど、目的をさだめての教育であるから、その軌道からはずれたり、それにのることのできない子どもたちが、必ず生じることになる。教育者たち(先生や親たち)相互の教育観や指導技法におけるズレも、子どもたちの心理療法を必要とする事態を生じさせるだけでなく、子どもとその関係者たちのための心理療法(たとえば、関係療法)をも必要とするにいたる。

心理療法は、客観的現実から相対的に独立した人間の世界を尊重し、人間相互のはたらきかけによって、変化させ得る領域をあきらめることなくひろげていく活動である。

*

*

*